

## 中国都市の職場・家庭におけるジェンダー役割と生活時間配分

西村雄一郎\*

- I はじめに
- II 中国の日常生活におけるジェンダー役割の変動
- III 調査データからみたジェンダー役割の状況
- IV おわりに

### I はじめに

この論文では、最近の職場・家庭におけるジェンダー役割を、中国3都市に居住する世帯男女の生活時間配分から明らかにすることを目的とする。中国における女性の日常生活をめぐる状況が、改革開放政策以降大きく変化している。このような変化について、従来の研究を整理するとともに、中国における活動日誌調査データを用いて、具体的にジェンダー役割と生活空間の関係を考える。

中国における生活空間は、理想的には、社会主義的な論理によって形成されており、男女の位置づけに関する「伝統的価値観」は否定され、男女の平等化政策が推進された。しかし、現在の中国における日常生活の状況は、そのような理念とは異なり、職場・家庭の両面で男女の不平等がみられることが指摘されている。

職場の状況について考えると、近年の労働環境は、女性と男性が同等の状況にあるとは必ずしもいいがたい。低廉な労働力の利用をめざした企業を中心とした女性雇用が増大する一方で、女性労働の忌避や就業継続の拒否が行われるという問題が発生しており、全体として労働力の不安定化が進行している。一方、家庭における状況においても、日常生活の基礎的なユニットである単位の再編成が進行しており、このことは、再生産に関わる各種サービス供給の点などから家庭生活のあり方に大きな影響を与えるものと考えられる。

以上は、職場や家庭におけるジェンダー役割の変化としてとらえることができる。

---

\* 総合地球環境学研究所研究部

すなわち、職場では、職種、より細かな業務、賃金や労働条件などで男女間の異なる取り扱いがなされ、男女は異なる役割を持つものとして位置づけられる。家庭においては、家事や育児など個人や世帯の再生産に関わるさまざまな活動で、男女間に異なる役割が付される。

本稿では、中国3都市（大連・天津・深圳）で行われた活動日誌調査に基づく生活時間配分データを主に用いて、職場と家庭生活の結びつきからみたジェンダー役割の状況を具体的に明らかにする。

## II 中国の日常生活におけるジェンダー役割の変動

### 1 ジェンダーと生活空間

ここで、中国の社会主義都市のジェンダーと生活空間の形成に関して、20世紀の資本主義都市における変化と比較しながら、その概略を整理したい。

20世紀における資本主義都市では、近代以降の職住の分離と、それに結びついた性別役割分業が労働者層にも導入されたことで、日常生活に大規模な変化が生じた。特にフォーディズム期には、大量生産体制の確立に伴う労働生産性の向上と引き替えに、雇用安定と生産性インデックス賃金がもたらされたが、ここでの労働者とは、男性労働者のことを意味していた。フォーディズムは核家族世帯をその前提とし、男性が中心的稼ぎ手(breadwinner)として存立しうるための家族賃金を保証し、維持するシステムであった。それに対して、女性は、家事・育児の役割を担い、賃労働では二次労働市場へと位置づけられた。生産活動の拠点として男性中心の職場がつくられ、女性は再生産活動を家庭において行うという性別役割分業と結びついた空間のあり方が都市形成の中心的な論理となった。

一方、中国の都市の社会主義化とは、資本主義による都市のあり方を再編成することであった。再編成のひとつは、資本家-労働者という階級構造が、官僚的な等級制度に置き換えられたことである(陳, 1994)。等級による賃金格差は小さかったものの、高い等級を持つ者には、政治的な優遇、住宅や食品、自動車などの消費財や各種のサービス供給における優遇が行われた。もうひとつは、消費都市を生産都市に変革

することであった。資本主義における搾取者の享樂的な消費のあり方は否定された。大衆向け・衣食住の基本的な消費の充足のみが都市の商業・サービス業の役割とされ、消費水準の画一化が進行した。

またそれと同時に、男女の平等も計られた。封建的な家族制度から近代家族への変革が、男女の同等な権利を定めた婚姻法の改正、男女の別なく分配された土地改革法などの制定によって計られた（小野，1978）。これによって、男女の家庭内の地位を平等化し、両性がともに生産に貢献することが期待された。特に工業・農業生産の向上が社会全体の目標とされ、労働力が逼迫状態にあった1950年代から1970年代までの状況において、女性労働力の積極的な利用が進んだ。

こうした社会主義による都市再編成を実現するために、単位が生活空間の基本に置かれた。単位においては、1つの職場を中心として労働者の生活が全面的に組織・管理された。職場・住宅・商店や学校・病院などの施設は単位により運営・管理される。空間的にも、職住は基本的には近接することが多く、生活に関連する機能がその周辺に集められた。これによって、資本主義都市における生産・消費の空間とは異なった政治的な管理と消費における平等をめざした空間編成が行われた（陳，1994）。同時に、単位においては、女性の家事・育児の負担を減少させるように家事労働の社会化が行われ、単位の経営する食堂や保育所、幼稚園、生活サービスステーション<sup>1)</sup>などの施設がつくられた（小野，1978）。

生産組織は、消費や社会福祉上の組織でもあるため、職場と家庭の間は別々に切り離されてはいなかった。これによって家事・育児サービスの社会化が積極的に進められたことは、男性が一義的に職場における生産活動に位置づけられ、女性が家庭における再生産活動に位置づけられるという資本主義社会の多くにみられた性別役割分業のあり方とは、大きく異なるものであったといえよう。

しかし、このような単位による職住の近接が実現され、男女の平等がうたわれた中国の社会ではあるが、実際の日常生活において男女の固定的な役割が解消されたわけではない。出産や授乳など社会化の難しい部分が依然として存在した。このように、女性が子育てに関わらなくてはならない時期には、男性並みに職場で働く場合には、家事・育児時間がそれに加わるために、過重労働となり、身体をこわす女性がみられ

た（秋吉・藤井，2000）。育児や家事などのために女性が労働時間を減らした場合には、その女性の労働に対する評価を下げるといったこともなされた（小野，1978）。しかも同種の作業内容であっても女性の作業評価は男性に比べて低く設定されており、また、より高次の技術を用いる評価の高い作業は、その従事者のほとんどを男性が占めていた（秋吉，1997）。

また、定年年齢は一般的には男性が60歳、女性が50歳で（青井，1996）、女性の定年退職が男性よりかなりはやい。このことから、女性が家族内の家事・育児の役割の担い手となっていることが想定される。中国における女性の年齢別就業率は、出産・育児期である20-30歳代に低下する傾向はみられない。このことは、労働力全体でみた場合には、出産・育児が女性の就業継続にとって大きな制約となっていないことを示唆している。一方で、男性に比べて女性の定年年齢が大幅に低いことで、女性が定年退職後に子供世帯の家事・孫の育児の分担を行うことを容易にする。すなわち、本人が自分の子供の育児を行うのではなく、孫の世代の育児を行うという、二世帯のライフサイクルを通じて、女性を再生産労働へ振り分けるような仕組みが成り立っているとも考えられる。

## 2 性別職務分離と世帯・家事

単位を中心とした生活空間は、改革開放路線への転換以降大きく変化しつつあり、従来の生活空間のあり方は再編成されている。

まず、職場における男女の労働の状況について考える。従来においても、職場における男女の労働の格差は存在してきたが、市場競争の導入によって、新たな問題が生じている。

ひとつには、従来型の国営企業が衰退する中で、結果的に女性が国営企業の人員整理の主な対象となっていることである（秋吉，1997）。女性の賃金上の平等や福利厚生施設の存在は、国営企業における高コスト体質の一因とされ、合理化政策によって、医療・保健施設や託児所、教育施設などは縮小もしくは廃止の方向が打ち出されている。こうした福利厚生施設の多くは整理統合されるか、別組織への移管などによる企業化が進行している。また、国営企業以外においても、女性の出産・育児へ

の保護措置が、労働力利用上の追加的コストと見なされる傾向にあり、女性労働者の雇用が避けられたり、人員整理の対象とされたりしている。

一方で、改革開放政策のもとで発展した郷鎮企業や三資企業（外資との合弁・外資単独による企業）においては、低賃金で劣悪な労働条件・環境である場合が少なくない。この中で増加しているのは、就業機会の少ない農村地域からの出稼ぎ労働者であり、そのほとんどが若年女性によるものである（秋吉・藤井，2000）。企業は、体力・まじめさ・勤勉さを備えた女性労働者を、短期間契約に基づき確保することが可能であり、低賃金・フレキシブルな雇用形態をとることで、国際市場における競争優位性を実現した（徐，2003）。

その一方で、三資企業などの新たな企業において管理・技術職といった高地位の職業につく女性も増加しているが、未だその数は非常に少なく、依然としてその圧倒的多数は男性によって占められている。また、都市における家事労働者・個人サービス業など、インフォーマルセクターにおける女性雇用に就業する女性も増加しており、不安定・低賃金の女性労働は全体として増加している。

例えば、国家統計局と全国婦人連合会による全国の女性の地位についての調査では、女性の収入はこの10年で大幅に向上したものの、男性との収入格差は拡大していることが示されている（海外労働時報，2002）。1999年都市部就労女性の年間平均収入は7,409.7円で、男性平均収入の70.1%であるが、男女間収入格差は1990年に比べ7.4%拡大している。女性は比較的収入の低い職業に多く集中しており、同じ職業の中でも女性の職務は男性より賃金が低い。

都市における女性就業率の変化は、1960年にはほぼ20%であったものが、1980年には35%と急速に増加した。しかし1988年に37%に達した後はほぼ横ばいとなっており（秋吉，1997）、職場への女性の参入は頭打ちの傾向を見せている。

これらの点から、中国の職場における男女の格差は近年縮小しているとはいえ、さらに、発展部門において性別職務分離が増大し、衰退部門において女性労働が集中していることから考えても、職場における男女間の格差は今後ますます広がる可能性がある。

### Ⅲ 調査データからみたジェンダー役割の状況

#### 1 調査世帯における男女の職業の差異

ここで、労働・家事・余暇・休憩時間などの時間配分、さらには家事分担の問題を、中国の3都市（大連・天津・深圳）で行われた活動日誌調査に基づく時間収支データの分析から明らかにする<sup>2)</sup>。

まず3都市における世帯の男女の職業の組み合わせについて考える（第1表）。3都市の調査対象世帯においては、妻が管理的職業に就いている場合には、夫も管理的職業である場合が多く、その逆に夫が管理的職業の場合には、妻がそれ以外の職業である場合がかなり多い。このことは、同一世帯においても、女性の職業上の地位が低い場合が多いことを示している。

それ以外の職業については、都市間の差異が大きい。例えば、天津・大連では、夫妻とも工場労働者の世帯が全体の約1/4を占め、その割合が非常に高い。それに対して、深圳では、夫妻とも工場労働者である世帯は少ない。深圳では、妻が工場労働者の場合、夫が事務職である世帯の方が比率が高いのである。これらのことから、特に深圳において女性が多くブルーカラー的職業に就き、男性がホワイトカラー的な職業に就くという男女間の差異が他の都市よりも大きいということがわかる。

また、深圳の場合、夫が管理的職業・専門技術職に就く割合に比べて、妻が管理的職業・専門技術職に就いている割合が特に小さい。他の2都市でも、特に管理的職業において男女間の差異が見られるが、特に深圳の場合、夫の職業の1/4以上が管理的職業であるのに対して、妻の場合は5%程度と差異が大きい。

その一方で、深圳の場合には、妻が無職である割合が高い。天津では4%ならず、大連では7%が無職であるのに対して、深圳では17%と非常にその割合が高い。この点は、深圳において特に専業主婦的な役割を担う女性が多く存在していることを示している。

天津・大連では、管理的職業や専門技術職などの高地位の職業に就く女性の比率がかなり高く、主要な職業のひとつとなっている。その一因としては、女性が結婚・出

第1表 調査対象世帯の夫妻の職業構成

深圳 (%)

		妻の職業							計
		管理的職業	専門技術職	事務職	工場労働者	商業・サービス業	その他	無職	
夫の職業	管理的職業	3.2	2.1	8.5	4.8	2.7	1.1	4.8	27.1
	専門技術職	0.5	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	1.1	13.3
	事務職	0.5	2.1	7.4	6.4	1.1	1.6	2.7	21.8
	工場労働者	0.0	0.5	2.1	4.3	1.6	2.1	3.7	14.4
	商業・サービス業	0.5	0.5	1.1	0.5	1.6	0.5	1.6	6.4
	その他	0.5	1.1	3.2	1.1	2.1	5.3	2.7	16.0
	無職	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	1.1
	計	5.3	9.0	25.0	19.1	11.2	13.3	17.0	100.0

天津 (%)

		妻の職業							計
		管理的職業	専門技術職	事務職	工場労働者	商業・サービス業	その他	無職	
夫の職業	管理的職業	4.3	2.9	3.9	4.7	1.1	0.4	0.0	17.2
	専門技術職	1.8	8.2	2.2	5.0	1.4	1.1	0.7	20.4
	事務職	1.8	0.7	3.6	2.5	1.4	0.4	0.0	10.4
	工場労働者	1.8	5.4	3.9	25.1	2.2	0.7	1.4	40.5
	商業・サービス業	0.0	1.4	0.4	0.4	0.0	0.7	0.0	2.9
	その他	0.4	1.1	1.4	2.5	1.4	0.0	0.0	6.8
	無職	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	1.8
	計	10.0	20.1	15.4	40.1	7.5	3.2	3.6	100.0

大連 (%)

		妻の職業							計
		管理的職業	専門技術職	事務職	工場労働者	商業・サービス業	その他	無職	
夫の職業	管理的職業	6.4	4.8	1.6	7.5	2.1	1.1	2.1	25.7
	専門技術職	3.7	7.5	1.1	4.8	1.1	1.6	2.1	21.9
	事務職	0.0	1.1	1.6	0.5	0.0	0.0	0.0	3.2
	工場労働者	1.6	1.6	0.5	24.1	3.7	2.7	1.1	35.3
	商業・サービス業	0.0	0.5	0.0	1.1	2.1	0.0	0.0	3.7
	その他	1.1	1.1	1.1	2.1	1.1	2.1	0.0	8.6
	無職	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	1.6
	計	12.8	16.6	5.9	40.1	10.2	7.5	7.0	100.0

産・育児期においても、多くの場合職業継続が可能であることから、男性に比較してキャリア形成上の不利が小さいことが考えられる。しかし、夫妻の職業全体をみた場合、男性が比較的優位な職業に就く傾向があることから、男女の格差もが全くないというわけではない。

一方、深圳においては、他の2都市と比較して男女の職業上の差異が大きく、また、専業主婦も多い。市場経済化の先進地である深圳においてこのような傾向があることは、職場における男女を異なる職務へ振り分ける性別職務分離、世帯において男性を賃労働に女性を家事労働・育児に割り当てる性別役割分業の両者を伴って、資本主義化が進行していることを示唆している。

## 2 生活時間配分の基本的構成と地域差

次に世帯における男女の職業と生活時間の構成の関係について考える。生活時間配分に関しては、仕事・家事・買物・私事・睡眠・移動・余暇の7つの分類によるそれぞれの活動時間について、その1日の総時間を尋ねた結果を利用した。

まず、平日の夫の生活時間配分に関する第2表によると、夫の仕事時間は、平均で1日6時間程度から7時間20分程度となっている。平成13年社会生活基本調査によると日本における平日の有業者男性の仕事時間は平均8時間2分であり、それと比べると仕事時間は短い。仕事時間の地域差では、深圳が大連・天津に比べ、1時間以上長い。

睡眠時間をみると、どの都市においても7時間から8時間以上の睡眠時間をとっていて、日本と比較してもかなり長い。仕事時間の長い深圳で睡眠時間が長く、大連が最も短く、天津がその中間である。荒井(2003)において、出勤時刻の差が自然時の差異と一致しており、大連が最も早く出勤し、天津がその中間、深圳が最も出勤時間が遅いことが明らかにされている。このことを合わせて考えるならば、就寝時刻は3つの都市でそれほど差異がなく、起床時間の地域差が、睡眠時間の長短となっているといえる。

次に夫の家事時間の地域的な差異について検討すると、家事時間は、深圳で最も少なく大連・天津の順に多くなる。この差異は仕事時間の差異と逆であり、仕事時間の

第2表 平日夫の生活時間配分

	(分)		
	深圳	天津	大連
仕事	440.0	352.7	376.7
家事	30.0	67.5	49.0
買物	5.7	39.1	14.4
私事	184.3	223.8	211.9
睡眠	533.5	506.0	448.6
移動	50.7	50.2	83.3
余暇	195.8	199.6	256.5

多い深圳においては家事時間が少なく、仕事時間の少ない天津において、家事時間が多いという関係がみられる。家事時間の最も短い深圳では、30分程度、大連では50分弱、天津では1時間強の家事が夫によって行われる。平成13年社会生活基本調査による日本の平日の男性の家事時間が平均約25分で

あることを考えると、深圳では日本並みの家事時間しかなく、それ以外の都市における夫は、かなり家事時間が長いという結果となった。

同様に、買物時間においても、深圳の夫の平均買物時間が最も短く、天津の夫が最も長い。深圳の場合に、家事に関連する活動への夫の参加は低調であり、一方で天津の場合には、夫による家事の分担が多く行われていることが示される。

平日の妻の職業と生活時間配分の関連を示した第3表によると、仕事時間は3都市とも平均6時間弱であり、地域的な差異は小さい。日本と比較しても、仕事時間は全体的に長く、結婚後もフルタイム労働を行う女性が一般的であることを示している。深圳の夫の仕事時間が長いことに比べ、深圳の妻の仕事時間は他都市の妻とほとんど変わらない。深圳の経済発展に伴って、労働時間の長時間化があるものと考えられるが、そこに何らかのジェンダー差異が働いていることが推測できる。特に定住人口においては、比較的地位の高い男性が長時間労働となり、一方妻の場合はそうした高地位の職とは異なる職業、もしくは専業主婦となっている。

平日の妻の睡眠時間は、それぞれの都市における夫とほとんど変わらない。妻の家事時間は、どの都市においても1時間半以上であり、天津では最も少なく、約1時間半、深圳では2時間強、大連では約2時間20分ほどである。世帯の平均家事時間が天津で計180分、深圳で計185分であり、大差ないことから考えると、妻の家事時間が短い天津では、夫の家事時間が長く、夫と妻の両者で家事

を行っている世帯が多いことを示している。それに比べ深圳では、女性により多く家事労働が割り当てられている。

平成13年社会生活基本調査では、日本の女性の家事時間は平均3時間44分、有配偶者の場合は平均5時間2分という長時間の家事関連活動を行っている。これと比較すると、全体

的に中国世帯における妻の家事時間は短い。中国では特に育児サービスの社会化が進行していることや、男性による家事の分担が行われていることがその理由として挙げられる<sup>3)</sup>。

以上の生活時間配分の傾向から、日本との比較においては、仕事時間の男女差が少なく、夫の仕事時間はさほど長時間であるとはいえないこと、また、家事時間においては、妻の家事時間が少ないことがわかった。また、生活時間配分の地域差を男女差の面から考えた場合には、深圳とそれ以外の都市の差が明瞭にみられる。深圳では、夫の仕事時間は妻に比べて長く、また家事時間は妻と比べて非常に少ないことがその特徴としてあげられよう。すなわち、男性は賃労働のみにかかわり、女性が家事労働に従事するという性別役割分業モデルが深圳の多くの世帯においてみられることがわかる。

### 3 職業による家事分担の差異

生活時間配分の基本的な構成から、特に深圳の世帯において、夫の仕事時間が長く、逆に家事分担が非常に少ないという特徴が明らかになった。そこで、深圳における夫の職業と妻の職業が、家事時間の分担にどのような影響を与えているかについて、第4表に示した。

深圳の夫は、家事時間自体が他地域に比べて少ないことは先にも述べたが、その状況は、夫と妻の職業の階層差によって異なることが、この表から示唆される。

第3表 平日妻の生活時間配分

	(分)		
	深圳	天津	大連
仕事	347.1	344.0	341.7
家事	128.7	91.2	142.3
買物	25.8	44.9	27.7
私事	182.3	198.7	202.7
睡眠	539.0	513.6	451.9
移動	45.8	55.3	78.0
余暇	171.5	192.5	197.1

第4表 深圳における対象世帯の夫妻の職業と夫の家事時間

		(分)						
夫の職業	管理的職業	専門技術職	事務職	工場労働者	商業・サービス業	その他	無職	
夫の家事時間	23.8	29.0	31.2	34.3	46.9	18.5	112.5	

  

		(分)						
妻の職業	管理的職業	専門技術職	事務職	工場労働者	商業・サービス業	その他	無職	
夫の家事時間	51.4	41.3	29.4	25.6	6.0	42.0	16.2	

夫が管理的職業に就いている場合、家事の時間が最も少ない。それに対して、商業・サービス業に就く夫は、家事の分担時間が管理的職業の夫の2倍近くとなる。一方、妻の職業が商業・サービス業である場合、ほとんどの夫は家事の分担を行わない。それに対して、妻が管理的職業に就いている場合には、夫の家事時間が相対的に多くなるのである。

このように、夫の職業階層が高い世帯の場合、夫が家事をする割合が低く、女性の職業階層が高ければ、男性の家事をする割合が高くなる傾向があることがわかった。データのサンプル数や精度の問題からこれ以上の分析を行うことは難しいものの、職業の階層差が、世帯の夫妻による不均等な家事分担に関連している可能性を指摘することができよう。

#### IV おわりに

以上の生活時間配分の分析の結果、世帯の男女間の差異が中国においても存在することがわかった。改革開放以降の変化の中で、企業においては、男女の職場における位置づけの差異化が進行し、同時に家事・育児サービスの社会化によ

て、社会主義的な生活空間の考え方も変化している。企業の私営化などサービス提供主体の変化によって、無料・安価なサービスが提供されなくなったり、また単位が中核となった近隣におけるサービスが減少することによって、家庭において新たに家事を行わなければならない場合も出てくる。私営企業によるサービスが提供されることで、高所得世帯においては、家事を代替するさまざまなサービスを受けることができるが、低所得者層にとっては、家事サービスを受けることが従来よりもより困難になり、そうした世帯の妻にとっては、賃労働と家事・育児の二重の負担がこれまで以上に増加することも考えられる。

その一方で、資本主義的な消費経済の普及によって、電化製品などの消費財を通じた家事の省力化が進展するものと考えられる。また、スーパーマーケットで容易に購入できるようになった加工済み食品や冷凍食品の普及によっても、家事時間の省力化が進展するであろう。しかし、消費財の普及は、家事時間の減少をもたらすような効果のみではない。例えば、洗濯機の普及は以前は近隣で行われた洗濯の住民サービスを衰退させている（根橋，1996）、このことは、世帯で行うべき家事が以前に比べ増加することを意味している。すなわち、消費財の普及による変化は、家事時間の減少をもたらすプロセスと、社会化されていた家事などを再び家庭内で負担しなければなくなるプロセスの両面を含んでいる。

こうした職場と家庭の両面における変化を明らかにするためには、家庭内における男女の家事・育児の分担がどのようになされているのか、また家事に関連する外出活動や育児期における送迎の分担などがどのようになされているのかを、具体的なデータに基づく分析から明らかにする必要がある。今回の生活時間配分に関する分析は、データ上の制約もあって、予察的な分析にとどまった。今後は、より詳細なスケールでの調査に基づき、職場・家庭内でのジェンダー役割の変化を明らかにしていきたい。

注

1) 生活サービスステーションとは、洗濯物のつくろいからそうじ・買い物・病院の世話など数

百のサービスを行う組織である。その世話役は、定年退職し、年金を受給する女性高齢者であることが多いという（小野, 1978）。

- 2) この調査は、都市戸籍を持つ定住人口に対して行われたものであり、流動人口に対しては行われていない。そのため、臨時雇やインフォーマルセクターなどに就業する階層の労働者とは結果が大きく異なると考えられる。
- 3) 日中間の女性の家事時間の大きな差は、むしろ日本女性の家事時間が国際的にみても著しく長いことによるものと考えた方がよいかもしれない。日本以外の国と比較した場合、中国世帯の妻の家事時間が顕著に短いとはいえない。

## 文献

- 青井和夫 1996. 『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会.
- 秋吉祐子 1997. 中国経済開放体制下における女性労働. 藤井光男編著『東アジアの国際分業と女性労働』ミネルヴァ書房.
- 秋吉祐子・藤井光男 2000. 中国企業の働く女性. 柴山恵美子, 藤井治枝, 渡辺峻編著『各国企業の働く女性たち: 取り巻く現状と未来展望』ミネルヴァ書房.
- 荒井良雄 2003. 外出活動の日中都市比較. 東京大学人文地理学研究 16, 1-40.
- 海外労働時報編集部 2002. 海外リポート中国 賃金格差が拡大(業種別・学歴別・男女別等). 海外労働時報 319, 8-9.
- 徐 向東 2003. 新しい時代を迎える中国の社会・経済と労働—格差の拡大, 労働雇用の変化, 産業中間層の誕生と日本企業の対応—. 海外労働時報 333, 58-67.
- 陳 立行 1994. 『中国の都市空間と社会的ネットワーク』国際書院.
- 根橋正一 1996. 改革開放期における居民委員会活動と「社区」建設. 青井和夫編『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会.

## Gender Role in the Workplace and the Home in Chinese Cities: A Time-Budget Analysis

Yuichiro NISHIMURA\*

This paper discusses the gender role in the workplace and the home by using the time-budget analysis of Chinese household. Nowadays, Chinese daily lives are changing by the effects of open economic structure. The author argues these changes by reviewing the some of recent studies and analyzing the time-budget data from activity diary survey of several Chinese cities.

In the construction of socialistic China, the state intended to make the equal position of female and male in the family. By modernizing the family form, women could work outside of home, and they supplied the need for the industrial and agricultural workforces.

The danwei (work unit) is the basic unit of daily activities, in the building the socialistic Chinese cities. The workplace, accommodation units, shopping stores, schools and hospitals in the same danwei are closely located. The danwei operates the facilities like nursery home, living support station or day-care center for socialization of the domestic work. The workplace and the home is not spatially isolated, women's role are not fixed in the private sphere. Though most of household matters have remained on the female role and occupational segregation by sex has existed, separation of gender role has not clear than that of the capitalist society.

However, recent economic change to open policies affects the position of female labor. Equal pay between both sexes is declined and many firms avoid the female working in terms of cost inefficiency because they need additional welfare supports in their maternity or child rearing. Some service facilities for supporting women working are restructured. The gender gap in the workplace can enlarge.

Next, I analyzed the time-budget data from activity diary survey of several Chinese cities (Tianjin, Dalian, Shenzhen) to realize the relation between everyday working life and domestic life. Allocations of time for classified daily activities (work, household matter, shopping, other private matter, sleep, leisure) are measured, and I discussed the gender division in household by using these data.

Allocation of time is varied by these three cities. Working time of Shenzhen's husband is longer than that of Tianjin's and Dalian's. Because difference of wives' working time by these three cities is relatively short, large gender difference would be seen in Shenzhen's household.

---

\* Research Fellow, Research Institute for Humanity and Nature

Sleeping time in these cities is longer than that of Japanese. Gender difference of sleeping time is very small, which is unlike Japanese household (in Japanese household, wives' sleeping time is shorter than husbands' sleeping time). Sleeping time has areal difference between three cities. Sleeping time of Shenzhen is longer than that of Dalian (about one hour), because natural time could affect to sleeping time.

Shenzhen's husbands have shortest time for household matter. In Shenzhen, wives practice most of household matters. This gender division is not so much marked in other two cities. The gender role, which locate male to workplace and female to home is well observed in Shenzhen household. By the analysis of relation between occupational status of husband/wife and time for household matter, the difference in occupational status between husband and wife affects the balance of household matter between husband and wife. If the wife has high occupational status (like management position), husband would tend to do a household matter as compared with other household type.

By this analysis, gender role in household could be seen in Chinese household. I would like to point out the gender difference in home and workplace will accelerate as the capitalistic system expanded.